

幕末明治の写真師列伝 第九十回 宮下欽 その十二

越後軍司令部は、6月3日、今町の撤退兵を見附に收容して諸藩合議の上、山縣参謀に意見具申して「一時戦線を縮小し、増援を待って攻勢に転ずべし」と決定した。これにより3日午後より4日にわたって見附東方の山地の守備を全て放棄して撤退し、森立峠から半蔵金のラインに防衛線を引いて後退した。また今まで見附に駐屯していた薩摩藩、長州藩、上田藩、松代藩の各藩の兵も長岡に撤退した。

松代藩の5隊は西山麓の浦瀬村（長岡城の東北4キロの山際の部落）に留まり、この地の随所の砲台を守ることにした。浦瀬には松代藩の2隊の他、長州藩、大垣藩、高田藩の各1小隊と、松代藩、高田藩の砲2門ずつが配備されていた。枅窪嶺砲台と亀崎砲台にも松代藩部隊の砲2門が守衛と防衛を任務として配備されていて、大垣藩と交代で勤務に付いていた。

6月5日、枅尾口、森立嶺を守備していた長州藩より、松代藩大砲隊の兵を借用したいとの申し入れがあり、長州藩のフランスホート砲1門を引き受けることになった。この砲壘に対して攻撃してきた長岡藩兵と、数回にわたり奮戦することになった。この砲壘は長州藩、加州藩の兵が守っていた。この時の戦いで松代藩の大砲方付属の宮下甚吉が負傷している。

比礼嶺は枅尾の南南西にある比礼部落の西にある嶺で、標高300～500の高地で、比礼（ひれい）、枅窪、上鳩（かみにお）、桂の嶺があり、榎峠も近くという嶺であった。比礼嶺の征討軍の守備は、長州藩1小隊、加賀藩1小隊、松代藩2小隊と砲1門、飯田藩1小隊で、森立峠の守備は、高田藩1小隊、上田藩1小隊、加賀藩砲1門であった。

6月8日、松代藩四番小隊と高田藩兵半小隊が比礼嶺の砲壘の守備をしていたが、ここに長岡藩5小隊、会津藩2小隊、村松藩2小隊の兵約800の大部隊が攻撃してきた。少数の松代藩兵はこれによりたちまち苦戦となったが、地の利をうまく生かして防戦に努めた。これに浦瀬にいた松代藩の三番小隊、八番狙撃隊の半数が急遽、応援に向かい救援する。これらの兵の必死の戦いにより、ようやく同盟軍を退けることができた。ところが今度は夕刻に、守備が半数になった上鳩嶺に同盟軍が進入して、壘を築こうとした。この戦いでも守備の兵が少ない松代藩はこれを阻止して、逆に同盟軍に攻撃を加え敗走させる。このため築造半ばの壘も奪取することができた。この戦いで松代藩の四番小隊長・山越新八郎が負傷している。

6月9日、与板、原村の砲台守備に付いていた松代藩部隊に対して、同盟軍が度々、襲撃してきたがこれも撃退、敗走させた。この日の戦いでは五番小隊長・大野大右衛門が敵の銃弾により負傷している。

6月14日午後2時、上鳩嶺砲台と枅窪嶺砲台に同盟軍が来襲し攻撃を仕掛けてきた。この両砲台が同時に攻撃されたため、激戦となったが、上鳩嶺の同盟軍は松代藩の反撃に対抗できずに敗走していった。枅窪嶺砲台の当日の守備は大垣藩が担当であったが、戦中、大垣藩兵は砲台を捨てて退却する。これに対して松代藩に直ちに分隊して枅窪嶺砲台を奪還せよとの命令があり、その夜、同盟軍の側面より攻撃を仕掛けた。同盟軍もこれに反撃し、戦いは徹夜となる。

翌15日は朝から豪雨となり、山中一帯には霧も発生する状況であった。午前8時、同盟軍は弾薬不足のためか砲撃を止め敗走していったらしく、霧が晴れてみると敗走する同盟軍の姿が見えたため、松代藩兵は追撃したが、後に帰隊する。この戦いにより、18日、北陸道総督より松代藩に感状が下された。

9月19日、同盟軍が出雲崎奪還を狙って久保山上と海岸から攻撃してくるとの斥候の報告により、これに対して、薩摩藩、長州藩の兵は雲浦停泊中の蒸気船により海上から攻撃すること、松代藩は漁船に乗り蒸気船に従って海上漁船から攻撃し、乗船できない兵は陸地より進撃するように命じられる。砲台守備の加州兵は海上部隊の援護をすることとなった。

19日黎明、行動を開始。山田、寺泊を三方より攻撃する。同盟軍は砲台の大砲と陸路軍の大砲の着弾が正確なため、陣を捨てて逃走し、東方の山上に撤退して抵抗を続ける。蒸気船からの砲撃は効果がなく、海が遠浅で海岸線近くでの行動も困難なことから、薩摩藩、長州藩の兵は久保村付近に上陸し、それより山上の同盟軍を追撃しようとしたが、久保山は意外と急峻なため、これを諦めて、これ以上の追撃は困難と判断して、兵を収めて雲浦に引き上げることにした。

9月21日、大垣藩と交代して亀崎砲台の守備についていた松代藩五番大砲隊と十一番大砲隊は、この付近に新たに砲壘を築造して同盟軍に対して守衛していた。その夜午後9時頃、同盟軍200位の部隊が歓声を上げて攻撃してきた。

これに対して松代藩大砲隊は大いに反撃し、同盟軍に打撃を与える。隣の砲台を守っていた大垣藩より急ぎ援兵を請うとの連絡により、松代藩では直ちに士卒12名を向かわせた。夜半午前1時頃、同盟軍は砲壘近くの宮下、宮島、亀貝の部落の民家に放火して、その混乱を利用して再び夜襲を仕掛けてきた。この襲撃にたいして松代藩兵も猛反撃をしたため、同盟軍は敗走する。また、大垣藩兵が守る干場砲台にも田井村方面から同盟軍が夜襲を仕掛けてきたが、これもまた応戦の後、敗退させた。

22日朝まで同盟軍は執拗に夜襲を三度も仕掛けてきたが、各隊協力してこれも撃退した。そしてこの日午前10時頃にはさすがに同盟軍も退却していった。宮下、宮島、亀貝の部落は長岡城より約3キロという極めて近い距離にある部落で、この一帯は開けた平野部の中心で、当時はその前面に八丁沖といわれる大湿地帯がこの北の福島部落まで広がっていた。浦瀬にいた松代藩兵は長州藩兵と共に宮下、宮島、亀貝の部落に侵入した同盟軍を追って福島村までいったって帰隊した。

6月24日午後4時、松代藩の三番小隊、八番狙撃隊、五番大砲隊の3隊は大垣藩と交代して干場に守備に付く。ここで同盟軍の砲撃に対抗し応戦して砲撃を行った。大垣藩の砲戦より松代藩の砲戦の方が着弾が正確なため、同盟軍に大きく損害を与えたことが望まれた。このため同盟軍の大砲陣地からの砲撃はしだいに少なくなった。これは命中弾が多かったため、同盟軍の死傷者が極めて多いことが予想された。

（森重和雄）